

駐カウナス日本領事館臨時領事・杉原千畝夫人、杉原幸子氏
との会談（1993年8月4日）覚書

Interview with Yukiko SUGIHARA, Held on August 4th, 1993

渡辺 克義

Katsuyoshi WATANABE

はじめに

第二次大戦中に外務省の反対を押し切って査証を発給し、ユダヤ人を中心に約6千人の命を救ったとされる杉原千畝（1900 - 86）は、「日本のシンドララー」として知られる。

以下に示すのは、杉原夫人の幸子氏（1913 - 2008）に対して1993年8月4日に鎌倉市で筆者が行ったインタビューである。拙文の筆者の関心は、査証を発給し多数のユダヤ人を救った経緯よりも杉原の諜報活動にあった。この点で本稿は事実関係の発掘で十分な貢献をなすものではないが、幸子氏がどのように回答をしたかに（諜報活動に関しては、故意に明確な回答を示さなかったと思われる点もあるが、その点も含め）多少の価値は見出せるであろう。幸子氏は夫の諜報活動について実際に何も知らなかったのかもしれないし、単に触れられなくなかったのかもしれない。事実はその中間のように思われる。

* * * * *

渡辺：杉原氏のリトアニア赴任は情報収集にあったわけですが、氏がロシア語に堪能で、かつ軍歴があるとはいえ、武官ではない外交官の派遣となった背景は何ですか？ 既に、ロシア通ということでロシアに査証の発給すら断られたことのある事実を考えると、カムフラージュを狙ったということはないと思いますが……

杉原：リトアニアに領事館を設けることになった理由は、開戦が近いということで、情報を収集する必要があったからです。

渡辺：ということは、後から武官を送るということもありえたわけですか？

杉原：ええ、滞在が長くなれば。初めから武官を送るということはなかったわけです。それほど人は必要ではないですから。外務省は、杉原ならロシア語ができるということで人選を進めたようです。派遣は臨時のものでした。

渡辺：杉原氏なら外交官と武官の両方の役割が果たせるということだったわけですか？

杉原：ええ、そういうことです。

渡辺：杉原氏の手記¹によれば、カウナスに現れたユダヤ人はポーランドのドイツ軍侵攻地区からの住民だったとのことですが、ポーランドのソ連占領地区からのユダヤ人はいなかったのでしょうか？ また、ドイツ占領下のポーランドは東の総督管区と西の併合地区に二部されますが、具体的にはどちらの地区（管区）、どの都市からの出身者が多かったのでしょうか？

杉原：私にははっきりとはわかりませんが、おそらく占領政策が緩やかな地区からの人だったでしょう。

渡辺：杉原さんは、戦後も杉原氏と小野寺〔信〕氏〔1897 - 1987；元駐ストックホルム日本大使館

附武官]との間には手紙のやりとりがあったと記されていますが²、現存する書簡の中にはユダヤ人に対する査証の発給や諜報活動について記されたものはありますか？

杉原：(書簡は)全然残っていません。そもそもあまり頻繁にやりとりはしていませんでした。

渡辺：内容についてご存じのことはありますか？

杉原：ありません。

渡辺：ソ連の通過ヴィザの件について、あまりにも簡単に事が片付いている³のが不思議です。杉原領事の査証を得たユダヤ人は、改めてソ連通過ヴィザを申請する必要はなかったのですか？

杉原：詳しいやりとりについては存じあげませんが、杉原のロシア語がとても流暢であったためにロシア人に好感を持たれたようです。杉原が発行したヴィザを持ってユダヤ人がロシア大使館に今度はロシアの通過ヴィザを求めに行ったところ、すぐに発給してもらえたようです。事前に杉原が交渉していましたから。

渡辺：杉原氏が松岡[洋右]外相に宛てた1940年8月1日電(第67号)は「貴電22号ニ関シ……」という文句で始まりますが、この第22号は同年8月22日付になっています。これはどういうわけなのでしょう？

杉原：日付の誤りでしょう⁴。

渡辺：杉原さんをご主人が査証を出す時の心境に触れ、「私を頼ってくる人々を見捨てるわけにはいかない。でなければ私は神に背く」と記されていますが⁵、これには多分に宗教的な匂いがします。こうした考え方はお二人が信仰するギリシャ正教の教えに通ずるものですか？ キリスト教徒であるが故にユダヤ人に敵対的ということもありえるだけに、特定の宗教を持たない私には理解できないところがあるのですが……

杉原：自分たちが洗礼を受けたのは事実ですが、特別に敬虔な信者というわけではありません。だから、今では本のあの表現は誤解を与えるものだったと思っています。

渡辺：松岡外相宛1940年8月9日付第59号で言及のあるベルグマン氏のその後について何かご存じですか？

杉原：その後のことは存じあげません。

渡辺：シュトルンフ=ヴォイトキェヴィチ⁶によると、ルイビコフスキは小野寺武官に、ヘルシンキ、リガ、カウナスの公使ないし領事を紹介してくれるように求めたところ、かつて自分の部下であったという理由で、杉原氏を紹介したようです。ルイビコフスキが日本の旅券の取得が可能かと問うと、小野寺武官はその可能性を否定しなかったものの、差しあたって満州国の旅券を杉原氏に発給してもらおうよう求めたらよかろうと助言したとあります。この点については小野寺百合子氏も少し触れています⁷。その後、ルイビコフスキは駐カウナス・日本領事館を訪れ、杉原領事から細かい指示を受けたあと、第三帝国に向かったとあります。

以上の事実関係についてお答えいただけますか？ そもそも、ルイビコフスキは杉原氏と接触を持ったのはいつごろですか？ また、ルイビコフスキが杉原氏から受けた指示とは具体的にはどのようなものでしょうか？

杉原：何も存じあげません。

渡辺：杉原さんはルイビコフスキをご存じですか？

杉原：いいえ、存じあげません。

渡辺：杉原さんの書籍にある⁸、ケーニヒスベルクのポーランド人スパイとは、ヤクビヤニェツ(コードネーム — クバ)とダシュキェヴィチ(コードネーム — ベシュ)のほずですが、杉原氏が彼らと接触を持ったのは既にカウナスであったはずで、シュトルンフ=ヴォイトキェヴィチ⁹によれば、クバは Mizuno 少佐の著名入りの写真を見せることで信用を得たのだといひます。そして、さらに2、3週間後にはベシュが杉原領事の最も親しい友人になったようです。

ポーランド人の二人が杉原氏と接触したのは正確にはいつでしょうか？ また、Mizuno 少佐とはどのような人物で、杉原氏との関係は？

杉原：ポーランド人の二人は領事館に住んでいました。この質問については、詳しいことは存じあげません。

渡辺：カウナスの杉原領事とクバ、ベシュの関係は、杉原氏が軍事・経済情報入手し、代わりにポーランド側がベルリン経由でストックホルムに至急電を打てるよう機材を利用させてもらうというものであったといえます。また、ポーランド側は最高機密についてはけっして明かさず、杉原領事はそのことをわかっていただとのことです¹⁰。

杉原：そのとおりだと思います。二人のポーランド人のことはよく覚えています。クバは明るくて、おもしろい人でした。ベルツ [ベシュ] は真面目でしたが、やはりおもしろい人でした。私たちの子どもとよく遊んでいました。二人とも普通の人のように見え、諜報に携わっているようには見えませんでした。

渡辺：シュトルンフ＝ヴォイトケヴィチ¹¹によれば、駐カウナス・日本領事館の Sato 秘書なる人物がいたようです。もしかしたら、著者はストックホルムで囑託をしていた三井物産社員の佐藤吉之助と混同しているのかもしれませんが。あるいは、彼は杉原領事と密接なコンタクトがあったのでしょうか？

杉原：Sato なる実物については存じあげません¹²。

渡辺：フランスが降伏の危機に瀕していた頃、ミンスクからの情報で、赤軍がリトアニア、ラトヴィア国境沿いに軍備を進めていることをクバは知ります。しかし、この事実を杉原領事に知らせるべきか躊躇していたところ、杉原領事のほうからクバの心配を取り除いてくれるような事態となります。すなわち、杉原領事は、自分には決定権などなく事実を伝えることだけが仕事なのだと言ったあと、リガおよびタリンの日本領事が伝えるところでは、赤軍が配備を進めているとのことだが本当かと問うたとのことです。この際、クバは事実を杉原氏に話したことから、二人の関係はそれまで以上に確かなものになったといえます¹³。

この記述に間違いはありませんか？

杉原：そうかもしれません。

渡辺：1940年6月15日、赤軍はリトアニアに侵攻。こうした事態に直面し、杉原領事はクバに日本の旅券を発給することを決断。クバはラトヴィアに入り、同地で抑留されていたポーランド人と接触。こうしたポーランド人は、あるものはドイツ占領下で抵抗運動に参加することを、またある者は杉原領事から通過ヴィザを得て米大陸への脱出を考えます。結局、後者の手段を利用したのはユダヤ人で、ポーランド人では十数名に過ぎなかったといえます¹⁴。

以上は事実に符合すると思われませんか？

杉原：正しいかもしれませんが。

渡辺：この混乱した時期、ベシュはヴィルノからの伝令の指令に従い、杉原領事に2つの包みを届けたといえます。中身はポーランドの旗¹⁵で、杉原領事がベルリンに届けたあとは、ストックホルム経由でロンドンに送られることになっていたようです¹⁶。

こうしたことは事実ですか？

杉原：事実です。

渡辺：杉原氏のプラハ赴任にあたってベシュは個人秘書として同行します。これは駐独・大島 [浩] 大使との事前の協議の上でのことであったといえます¹⁶。また、ポーランド側の文献¹⁷によれば、杉原氏の協力でベシュはルビコフスキの指令どおりチェコスロヴァキアで十数名からなる諜報網を組織したといえます。

杉原：そのとおりかもしれません。

渡辺：クバは杉原氏の紹介でサビナ・ワピンスカと面識を得たといえます。サビナは Tsuguo Hirovani なる人物と愛人関係にあったともいいます¹⁸。杉原さんはこの二人について何かご存じありませんか？

杉原：存じあげません。

渡辺：ペシュが杉原氏と共にケーニヒスベルクに行き、クバはベルリンの日本の武官室の所属になったのは、どういう事情によるのですか？ ポーランドの歴史家ゴンデクは、後者の場合、駐スウェーデン公使館附武官・西村敏雄氏の影響があったと示唆しています¹⁹。実際はどうだったのでしょうか？

杉原：何も知りません。

渡辺：1941年5月、杉原領事、Sato 秘書、ペシュは車でクライペダに出かけています。車を運転していたのは杉原氏。途中で尾行されていることに気づき、車を停めてはあたかもピクニックでもしているかのように装います。ドイツ人の尾行はその後執拗に続きます。夕刻になりケーニヒスベルクに近づくと、ようやく尾行は終わりました。この時、ドイツ軍の配備を観察した結果、杉原領事は独ソ戦の近いことを確信します。その時期は2、3週間後の6月15日前後と考えました。調査はその後2、3度繰り返されています。杉原領事はペシュが収集した情報を携えてベルリンに赴きます²⁰。

以上の事実関係は？

杉原：Sato 秘書の件を除けば、事実に符合すると思います。

渡辺：杉原領事が40年5月9日付で打電した報告は、この時の調査がベースになっているように思われます。この報告に対する、外務省、駐ソ大使、駐独大使の反応はどのようなものだったのでしょうか？ 杉原さんをご主人が1939年末頃からドイツの敗戦を予想していたと記していらっしゃいますが²¹、もし杉原氏がこうしたことを強調していたとするならば、小野寺武官がそうであったように、親独の日本陸軍や大島大使からの厳しい批判は免れなかったものと思います。杉原領事はご自身の見解をはっきりと伝えていたのでしょうか？ もし伝えていたとすれば、軋轢は生じていましたか？

杉原：あいまいに大島大使にも伝えていたようです。

渡辺：杉原氏は、シュトルンフ＝ヴォイトキェヴィチが指摘するように、ドイツからマークされていることは気づいていたのではないかと思います。いかがですか？

杉原：マークされているのは感じていたようです。ただし、命の危険は感じていませんでした。

渡辺：クバは1941年7月にゲシュタポに逮捕されました。大島大使はこのことを伝える電報で、杉原氏に対しベルリンに出頭するように求めます。杉原氏は、ベルリンの満州国領事館および武官室にクバが保管していた書類のことが気になります。杉原領事はベルリンに出かけている間ペシュには外出を禁じます。この時既にペシュはケーニヒスベルクを出ることを決めています。杉原領事が戻ってきた段階で、ドイツ占領下のポーランドに入ることを明らかにします。幸子さんはこれに反対したといえます。杉原領事は、大島大使以下自分の上司がナチス寄りであることを挙げ、クバの救出が難しい旨をペシュに説明します。最終的には杉原夫妻は、ペシュがケーニヒスベルクを離れることを認めます²²。

以上の事実関係は？

杉原：事実です。

渡辺：ペシュの後任とされるコステクなる人物と杉原氏の関係は？ ペシュからのその後の連絡は？ 彼は本当にポーランドに入ったのでしょうか？²³ また、クバの右腕であったリトアニア人の館長オネ・マルティンチェンネと杉原はベルリンで会っているようですが、そもそも杉原氏は彼女をどう評価していたのでしょうか？

杉原：コステクなる人物については聞いたことはありますが、詳しいことは知りません。その他の件については何も存じあげません。

渡辺：ポーランド亡命政府が1941年9月22日付でポーランドの国内軍司令官ステファン・ロヴェツ

キに打電した報告書には付属文書があります。14番目のそれではクバの逮捕と杉原氏のことが述べられています²⁴。

a) 「ヤクビャニェツが逮捕されると、ゲシュタポは家宅捜査を行い、杉原のスーツケースを押収。中身については不明」。

これには何が入っていたのでしょうか？

b) 「ヤクビャニェツがベルリンの日本大使館に保管していた資料と活動資金については、7月および8月の初めに、ダシュキェヴィチは杉原にヴィルノの指定の場所に届けてくれるよう依頼した」。

この事実関係は？

c) 「日本人外交官のうち、第三帝国に敵対的な諜報活動を進めている者がいる。我々の第II部〔諜報・防諜〕と彼らが協力したためにヤクビャニェツは捕らえられた。このため、ダシュキェヴィチはイスタンブールに行かなければならなくなったのである。杉原に容疑がかかっており、日本側は彼をドイツから出すことを検討している」。

この点に関しては？

杉原：何も存じあげません。

渡辺：フィンランドおよびルーマニア在職中の杉原氏の任務は？

杉原：外交官としての仕事のみでした。諜報活動はしていません。

渡辺：フィンランドおよびルーマニアではポーランド人とコンタクトはありましたか？

杉原：ありませんでした。

渡辺：ありがとうございました。

注

1. 杉原幸子『六千人の命のビザ』（朝日ソノラマ、1990年）24頁に引用。
2. 同上、45頁。なお、小野寺夫人の百合子氏はこの書簡の交換を否定している（渡辺克義「駐ストックホルム・小野寺信武官夫人、小野寺百合子氏との会談（1993年9月10日）覚書」『山口県立大学国際文化学部』第14号、2008年、134頁）。
3. 杉原、前掲書、35頁。
4. 中日新聞社『自由への闘争 杉原ビザとユダヤ人』（1995年、東京新聞出版局）191頁も単に日付の誤り（第67号が打電されたのは実際には9月22日ではなかろうか）と見ている。
5. 杉原、前掲書、204頁。
6. Stanisław Strumph-Wojtkiewicz, *Tiergarten*, wyd. V, Warszawa 1978, s. 83, 89. 同書は半フィクション、半ノンフィクションの書籍である。それだけに、筆者（渡辺）は事実関係を確認する上でも杉原夫人と会見する必要性を感じていた。
7. 小野寺百合子『バルト海のほとりにて 武官の妻の大東亜戦争』（共同通信社、1985年）104頁。
8. 杉原、前掲書、82頁。
9. Strumph-Wojtkiewicz, *op. cit.*, s. 88.
10. *Ibid.*, s. 101.
11. *Ibid.*
12. Sato なる人物はカウナスではなく、ケーニヒスベルクで杉原の秘書であった（渡辺克義訳「杉原千畝手記」『北欧史研究』（第15号、1998年）139頁）。杉原夫人が Sato について何も知らないということは信じがたい。なお、この Sato なる人物が佐藤吉之助とは別人であることは自明。
13. Strumph-Wojtkiewicz, *op. cit.*, s. 105-107.

14. Ibid., s. 108-109.
15. この旗に関しては、前掲「杉原千畝手記」138頁を参照のこと。
16. Strumph-Wojtkiewicz, *op. cit.*, s. 117.
17. Andrzej Peplowski, *Służby wywiadowcze Polskich Sił Zbrojnych na Zachodzie (1939-1945)*, Warszawa 1988, s. 270; Leszek Gondek, *Na tropach tajemnic III Rzeszy*, Warszawa 1987, s. 94.
18. Strumph-Wojtkiewicz, *op. cit.*, s. 121-122.
19. Gondek, *op. cit.*, s. 64.
20. Strumph-Wojtkiewicz, *op. cit.*, s. 175-177.
21. 杉原, 前掲書, 81-82頁。
22. Strumph-Wojtkiewicz, *op. cit.*, s. 201-207.
23. 次に言及する1941年9月22日付電報にあるように、ペシユはトルコに向かったようだ。もっとも、ドイツ占領下のポーランドを経由した可能性については否定できない。
24. *Armia Krajowa w dokumentach 1939-1945*, t. II, Londyn 1973, s. 81-82.